
美味礼賛

はあところ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美味礼賛

【Nコード】

N4412Z

【作者名】

はあとこ

【あらすじ】

女性料理人が世界を変える！

1話

世界情勢から説明しよう。西暦2811年。環境悪化により、国家は崩壊し、今や人が住むのは、六大陸の一つ、ユーラシアの南端だけである。六角形の支柱とオゾンドームで外周を囲まれた12箇所の都市の中である。各都市には自治組織も存在するが、最高行政機関は、年二回、全都市長が召集されて開かれる議会だ。市長の任期は4年。直接選挙によって選ばれる。首都は第一都市。ここに立法権と司法権を握る王が座している。王は都市の導き手であり、人格者でなくてはならない。故に、完全無欠の英才教育を施し、その心身を徹底管理する役目を負っているのが王宮庁である。議会と王と王宮庁。人類史上、最も歪な立憲君主制は、奇妙なバランス感覚を以って、既に300年維持され続けている。

第三都市には大陸最南端に位置し、12都市で唯一海がある都市である。六角の支柱の一つを180海里先の珊瑚礁に突き刺して、陸に立つ支柱に向かって海底を潜るように精密濾過膜が張ることによって外海に漂う汚染物を除去している。大抵は海洋資源採取の為に使われるが、毎年5月から6月、一週間程は遊泳許可も下り、その時季は12都市中から観光客が押しかけ、大賑わいとなる。しかし、今は9月。平日というのに、白い砂浜に人が集まっていた。何やら白い煙まで立ち上っている。

人の関心を集めていたのは白いアオザイを着た小柄な女性である。長い黒髪を高く纏め、露になった顔立は、20歳そこそこか。化粧をしていないのも手伝って、10代に見えなくも無い。

慣れた手つきで、炭を熾す。オール電化が進んだ世界は、火の存在も珍しい。形良く珊瑚を組んで、浅い鉄鍋を乗せながら具合を確かめているところで、中年の男が声を掛けた。

「お姉さん、塩でも作るのかい？」

苦笑しながら、女性は首をふる。塩作りは行政事業だ。こんなところで作っていけば、たちまち逮捕されてしまう。

「気になるかい？」

少し低めの声が悪戯っぽく響く。野次馬たちの目が輝くのを見てとって、女性はますます愉快そうに笑う。

「もう少し待つといで。」

そう言つて、傍らに置いてあつた鞆より包丁とまな板を取り出し、ニンニクを刻み出した。

信じ難いことである。女性が始めたのは料理。それはとうの昔に失われた技術である。

都市制の始まりは人が料理を手離した始まりでもある。食糧難の時代を迎えて以降、食事とはタブレットであり、液体であり、あるいは点滴であり。要は栄養を摂取できればよいというのが常識である。歯科医学会は歯の健康の為に人工食物を喉に流し込むようにとるのが良いとし、顎の退化を留めるために一日3回薬用ガムを噛むことを推奨している。そんなご時勢。

人垣が一步後退した。

「お姉さん、かわいい顔して、気持ち悪いこと言つなよ。」

女性は笑顔で、まあ待つてな、と返すのみである。鍋にオリーブオイルをひき、ニンニクを放れば、やがて胃を刺激する香ばしい匂いが漂い始めた。近づかないまでも、身を乗り出す者が出てきた。

女性は次々に材料を刻み、鍋に入れてゆく。ケツパー、オリーブの実、アンチョビ、トマト。料理を知らない者に言い聞かせるように、食材の名前を言つてゆく。

「これが、あつちの浅瀬で拾つたあさりと、港でもらつた鯛だ。」
野次馬どもが息を呑むのも構わず、女性は丸ごとそれらを鍋に入れると蓋をしてしまう。煮込んでいる内に、さつさと調理道具を片付け、砂浜に敷物を広げる。食器を取り出したところで、頃合である。蓋を上げれば、トマトに彩られた魚がほろりとした煮姿を現わした。手早く身を分け、皿に載せた瞬間、女性の顔に蠱惑的な笑みが

のる。

「さあ、出来た。アクアパツア、めしあがれ！」

誘われるように中年男が前に出た。慣れないフオークで、恐る恐る身を掬う。ちらりと女性を見て、笑みに促されるままに口に運んでみれば。

「う、まい。」

「でしょ？ほら、皆も！食べた、食べた！」

その後は一気である。あつと言う間に鍋は空。群集と女性、相互に満足気だ。

美味しいものは場を和ませる。後片付けは全員で行った。

「お姉さん、ありがとうな！」

「いやいや、こちらこそ。食べて下さり、ありがとうございます。」

それじゃあね。」

「ああ、またな！」

重い荷物をものともせず去っていく女性を皆にこやかに見送ったのである。

果たして、見送られた方は五分としない内に路地裏へ引き込まれていた。

「料理人が。王宮にしかいないと思っていたが。いい拾い物したな。」

薄汚い男二人組に後ろ手に拘束された女性は眉をひそめた。至近距離に顔を寄せられ、体臭と混じった安い酒の臭いが鼻をついたのである。

「顔も悪くねえし、仕込めば、客も取れそうだ。」、わざとらしい大笑いは威嚇の意味もあるらしい。顎を掴んで拳を翳しても、一向に怯えた様子を見せない相手に男達は苛立ち始めた。獲物は泣いて許しを請うくらいに従順であるべきだというのが、彼らの哲学である。

「おい、今犯してやってもいいんだぜ。しばらく料理も手に着かな

いくらいにな！」

「それは困る。」

男たちの背後から、穏やかな声が掛かる。慌てて振り返れば、三つ揃えのダークスーツを着た優男が社交辞令よろしい笑顔で立っていた。南国の暑さの中でも汗一つかいていない。その姿を認識した男達が震え始めた。

「白髪と赤目なんて…まさか…王宮長…。」

「正解だ、賢い下衆ども。ならば、解るな？それは王宮のモノだ。議会には誇り、王には敬愛、そして王宮には畏怖と絶対服従を。それが不文律。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4412z/>

美味礼賛

2011年12月15日02時50分発行